

歴史は未来の羅針盤



今回は、近江日野商人館からお届けします。近江日野商人館では、「近江日野商人の歴史新発見展」と題して、最近見つかった日野商人の歴史に関する史・資料を展示する企画展と、日野商人の家憲を書写する体験教室を開設しています。一度、ぜひお越しください。

日野椀の歴史

江戸時代の商人が全国で商った物のなかで、地元の生産物は「持ち下り商品」と呼ばれていました。

日野商人の持ち下り商品は、漆器椀類と合葉で、多くの日野商人によって全国津々浦々に販売され、「日野椀」、「日野合葉」という名で全国に知られていました。

日野椀は、江戸時代の記録では、平安時代初期に生産され始めたと言えられ、また室町時代初期の記録にもあり、大変に長い歴史がありました。

室町時代初期の「日野市」の内の「上の市」は、椀類のみが売り買いされる集散市場であったと伝えられています。やがて、蒲生定秀によって、日野城下が形成されると、城下の住民の七〇八割が椀類の生産や販売に従事していたと伝えられています。

江戸時代初めの記録では、「近江日野」が、全国の漆器の八大地のの一つに数えられ、また京都・大坂には、日野屋清右衛門、日野屋五郎兵衛などのように、「日野屋」の屋号を名乗って、日野椀を専門的に販売する多くの問屋があり、当時、日野椀がブランド商品的に扱われていたことがわかります。

また、日野椀が、個々の日野商人によって全国に販売されたことは言うまでもなく、江戸時代の記録上では、日野椀の生産や販売に従事した職人や商人の名前が、現日野町域の四十三の町・村で二百名余りも確認することができます。その生産は、全国的な組織に支えられていました。

椀に使用される木材は、地元の日野だけでは足らず、全国各地から日野に搬入されていました。例えば、次の史料は、寛政八（一七九六）年に現鳥取県で記録された

ものです。

木地椀 数多アリテ家具ヲ挽出シ 鳥取へ運送シテ 近江日野へ回シテ交易ス

つまり、椀の未完成品半製品を現鳥取県の山深い村で大量に作製させ、それを日野へ搬送させて、日野の木地師や塗師たちが完成品として仕上げており、日野椀の生産は、全国の山村に住む木地師たちの下請けによって支えられていたことがわかります。

このような椀類の半製品を求めて、全国で活動する日野の人々も多く、寛文十（一六七〇）年前後の記録に、「日野商人治左衛門」が現京都府美山町で、「江州日野安井助三郎」が現兵庫県美方町で「江州日野伴長右衛門手代清兵衛」が現鳥取県で、「日野屋清八」が現長野県伊那市で活動するなど、多くの人々が仲買人として全国で活動していました。

この治左衛門が、すでに「日野商人」と呼ばれているように、日野椀の原料を求めて全国で活動した人々の経験が下地となり、やがて、江戸時代の日野商人が登場した可能性があります。

日野椀は、日常的に使用する椀として生産されていたため、技術革新が進まず、美術工芸品的な他の産地物に遅れを取るようになり、今から二百年ほど前には売れなくなってしまいました。

ちょうどその頃、新たな持ち下り商品として登場したのが「日野合葉」でした。

次回は、日野合葉の歴史について記します。



▲ 日野椀を造った口クロ